

Jalan Jalan インドネシア

第65回「線香に煙るコタのひっそりとした仏教寺院、観音寺」

ジャカルタ北部コタ地区といえば古より中華街、華人街として知られ、中華料理の名店や中国漢方の店、中華食材の店、そして宝飾店、衣料品店、雑貨店などがひしめきあう異国情緒たっぷりの界隈である。

そんなコタでは「金徳院」が仏教寺院として最も有名で、ジャカルタ最古の仏教寺院ということから観光コースにも組み入れられることがあり、いつ訪れても線香とローソクを手に熱心に祈りを捧げる中国系インドネシア人に混ざって散歩や観光に訪れるインドネシア人や外国人、さらに寺院の敷地内でゆったりとした時間を過ごす周辺の住民と賑やかである。

この「金徳院」とは別にも仏教寺院がコタにはあるが、ひっそりとしながらもなかなか趣があり、静かに祈りを捧げるにはもってこいの「観音寺」を今回は紹介したい。

マンガブサル通りを東に向かって進む。日本人にはお馴染みの「俺の餃子」（俺ぎょう）とは反対側の歩道を約10分歩くと右側に大きなビルがあり、黄色に塗られたビルの3階部分正面に金色の仏像があり、通りから入るゲートには「卍」マークがあるので、そのビルが仏教寺院であるとわかる。住所はマンガブサル・ラヤ通りの58番である。

観音寺の正面、卍のゲートと3階の仏像が目印
(右)

香油の灯りと提灯の観音寺内部 (下)



どこの仏教寺院もそうだが基本的に仏教徒であろうがなかろうが、誰でも入ることができる。コロナウイルスの感染防止策で、入り口前には手洗い所が臨時に設けられている。水道の蛇口は足踏み式で、わからずにいると入り口前にいた関係者から足でペダルを踏むのだと教えられた。

この「観音寺」はビルの1階が一般に公開された寺院になっており、多くの仏が並び、備えられている線香を自由にとって立っただけ、あるいは跪いてと自由に祈ればよい。室内のために線香の煙と香油の熱気がやや籠っているところが風通しのいい「金徳院」との違いだろう。

正面の奥まったところに「釈迦牟尼仏」「観世音菩薩」「大勢至菩薩」があり前壇にはあまたの香油の小さな炎が静かに揺れて独特の雰囲気を出している。

左右には「関帝公」「財神爺」「大伯公」「白虎將軍」などがひかえており、香炉からは訪れた人の大小の線香から煙が絶えまなく立ち上っている。

「観音寺」は Vihara Avalokitesvara Temple と表記され、インターネット上の SNS 「Face Book」 にホームページをもっていて、その活動の一端を知ることができる。

今年の5月7日の仏陀の生誕を祝う「ワイサック」は折からのコロナ禍のため、観音寺での儀式は参列者なし、僧侶のみで執り行われその様子がライブストリーミングとしてネットで配信された。その時のことは当時の民放「メトロテレビ」のニュースでも取り上げられ、その映像も Face Book で視聴可能となっている。

正面奥の釈迦牟尼仏と観世音菩薩（右）

マスク姿で祈る人（下）



内部にあるエレベーター脇の壁には、観音寺をかつて訪れた有名人としてマアルフ・アミン副大統領、そしてスハルト元大統領の女婿で現在のジョコ・ウィドド政権で国防相を務めるプラボウォ・スビアント氏と一緒に写る観音寺の僧侶の写真が飾られていた。

観音寺の Face Book にあった言葉を記しておく。「阿弥陀仏原来一直在身边」この言葉あくまで個人的見解だが、ゲーテの「善きことはまことに近きにあり、幸せをとらえる術を知れ」に通じるものがあるのかな、などというようなことを思いながら釈迦牟尼仏に線香を手向けて祈った。



香油の灯りに浮かぶ仏像（左上）

観音寺を訪問したプラボウォ氏（中央）（左下）

正面入り口外の大香炉、左はペダル式の手洗い場所（右）